

〈講演〉

「地域で学ぶ・ボランティア」

法政大学教職課程センター長 尾木 直樹

話を聞いていて希望が湧いてきた

今日の僕の話はですね、地域でのボランティア活動っていう大きなテーマをいただいたんですけれども、地域っていうのはすごい重要だなんて思いました。ボランティアっていうのは色々な種類がありますよね。地域でのボランティアもあるし、国際ボランティアもあるし、それから趣味を生かしたボランティアもあるしね。あるいは仕事を生かしたボランティア、いくつかありますけれども、その中で今日のテーマは地域を生かしたボランティアという、地域に入っていくということが一つのテーマで、僕が非常に面白いなと思ったのが、少子化の中で、地域の方もいっぱいボランティアで入ってきたりすると、色々な大人との関係ができて、そういう中で成長していくんだっていうことです。

一般論で言うと、これを斜めの関係って言いますよね。親子の関係、それから学校の先生と子どもの関係っていうのは常に縦の関係ですけれども、地域の方っていうのは斜めです。真横は友達関係ですよ。そういうのを直に掴んでくるわけですよ。そしてやっぱり地域を欠くことはできないっていうわけですよ。一步突っ込んで言うそうですね、今市町村によっては学校選択の自由っていうのをやっているんですよ。学校を選べると。ある区なんか数十校ある小学校から好きなところを選んでやっているわけですよ。そうするとこれは、地域が完全に解体されることになるんですよ。

30 所帯のマンションの中に、6 人の小学生がいるとするでしょ。6 通りの小学校に行っ

ていたら、その子どもたちを地域で守ることができない。分かります？例えば今日、ふらふらしてるから、「何遊んでるの？」って聞いたら「創立記念日です」っていうかもわからないでしょ。地震が起きたら助けに行こうかと思ったって居場所がなかなか分からない。地元の小学校にひょっとしたら、誰も行ってないかもしれない。評判が悪いからとか、荒れてるからっていう噂で。こういう現象が今ものすごく起きていて、地域の空洞化が起きているんです。それで下町のある区なんか、怒っちゃってですね、町内会なんかをまた取り戻していこうっていう動きが次々と出始めています。

そういうことを、政策的には大失敗をしながら学んでいるわけなんですけれども、ボランティアしている皆さんは、もう先取りして掴むわけですよ。そしたらそういう政策が出そうになってきたときに、これおかしいんじゃないかって判断できますよね。だから、僕はやっぱりボランティアに行かれて、先程から報告してくれている皆さんを見ると、地に足をつこうとしてるなという感覚、すでに地に足をついている感じで、非常に嬉しいというか、こりゃ頼りにできるなって、希望が湧いてきました。

それから、やっぱりボランティアに行かれて皆さん元気をもらってますよね。ボランティアっていうのは人に奉仕するためでは全然なくて、そういうふうに思われてる時代もあったんですけれども、今はそうじゃなくて、自分にまともに役に立って、自分が生きる方向が見えてくるし、専門性が見えてくるし、視

野も広がる。大きな成果があるなと思いました。

今の若者たちはどうなってるかっていうことで、実は内閣が、2013 年の 11 月から 12 月、ちょうど昨年の今頃です。13 歳から 29 歳にアンケート調査を大規模にやったんですが、その結果 7 か国、国の名前で言いますと、スウェーデン、フランス、ドイツ、イギリス、アメリカ、韓国、日本っていう 7 か国の国際比較調査なんですね。それで日本の、特に若者たちの特徴が非常にシャープに出てきたんですけれども、日本の若者、この世代、10 代、20 代のところはですね、自分に自信がないけども人の役に立ちたいと思っている、この人間像というのがくっきりとしてきました。これは素晴らしいと思います。自信はないけどっていうところは問題だけれども、人の役に立ちたいっていう人がすごい増えてきて、一言でいうとですね、日本の若者は自己評価は低いと。だけれども社会貢献への意欲は持っている。こういう風に一言で言えるかなと思うんです。それで、アンケートの項目でいくつか説明しますと、例えば「自分自身に満足していますか？」っていう。これは専門的な用語でいうと「自己肯定感」って言いますよね。

自己肯定感の低さをどう捉えるのか

教育関係者が多いから一言言っておきますと、自己肯定感っていうと、文科省から東京都の教育委員会まで、みんな自己肯定感って言います。あるいは自尊感情っていうのをですね、特に強調してるんですよ。でもみんなね、それにしておかしいじゃないかと思わない？教育委員会の締め付け。これはね、なんでそうなってるのかっていうのを、理論的に深めてみてほしいと思うの。みんな悪気があるわけではないんですよ。一人一人はいい人。でも束ねると教育委員会はおかしいと思

います。

それで、どういうことかって言うと、自己肯定感っていうのはもうしょっちゅう聞くとと思うの。これは二通りあるんですよ。一つは社会的自己肯定感。それからもう一つは基本的自己肯定感。社会的自己肯定感っていうのを、教育行政は盛んに言ってるわけ。それは人から認められることによって、自分が肯定されてるんだ、認められてるんだっていう思いを強くしていくんだっていう、こういうアプローチの方法。

これに対して、心理の専門で言う自己肯定感っていうのは、基本的信頼感なの。基本的自己肯定感っていうやつ。あるがままを、今を、自分を、愛することができるか。「アナと雪の女王」と同じです。流行語ノミネートされていますよね。つまりありのまま、ありのままの自分を肯定できる。人様の前に出たらなかなか緊張して喋れない自分がいると。だけれどもそれは、自分はこれでいいんだって認めていける。これが大事なんですよ。あるがままですよ。寝坊して遅刻を何回もする子がいたら、まずはその子のありのままを愛することが大事なんですよ。教師は。分かりますか？「君は先週は 3 回も遅刻したけども、今週は 1 回で終わった。君頑張ってるよ」っていう、そういう肯定ではないんです。それは他者からそうされるもんじゃなくて、自分自身が自分を認めたときに、自己決定の力で脱出するわけですよ。ここに到達できてないの、日本の教育界っていうのは。だから日本の子どもたちは青年も大人も含めて、どの世代をとっても自己肯定感が低いんだと思います。

それから 2 つ目はですね、「自分の将来に希望を持っているか？」っていう問いに対して、日本で自分の将来に肯定的、希望を持ってるって答えたのは、61.6%。それから「40 歳になったときに幸せになっていると思うか？」っていう人はですね、66.2%なんです。6 割なんですよ、いずれも。これはね、7

か国の中で最下位です。一番低い。幸せになっているだろうってなかなか思えない。これはかなりピンチですよ。4割がですね、自分の将来に希望が持てないわけです。

それから3つ目。これが僕は引かかるんですけれども、中心的なテーマでないから、あんまり深くは分析しませんけども、「自分の国のために役立つことをしたい」という若者がですね、日本は54.5%とダントツ1位なんです。自分の国のために役に立つこと。皆さん、今さっき出てきたのは地域だとかでしょ。あるいは高齢者とか。けれどこれ、10代、20代、突出してるわけ。どの調査見てもね。

それで、ここにあるものはなんだろうって。日常生活の中でボランティア活動とか、あるいはインターンシップでも良いんですけど、色々なことの中で自分を見つめられないと、抽象化して国家に結びついてしまうっていうか、だから若者の右傾化っていうのが今問題になってますよね。そういう子どもたち、青年たちに、どのようにして希望を持ってもらって、自分を愛することができるかっていう。やっぱりそこはね、ボランティアなんです。あるいはインターンシップであってもいい。ここがきちんと位置づかないからだっていうふうに思います。

ボランティアで広がる学びの世界

このボランティアのこと、ちょっと歴史的に振り返ってみますと、元々日本でいうボランティアっていうのが、流行してきたっていうか、着目されたのは何年ぐらいからだと思います？あるいは何をきっかけにでも良いけれども。どうですか？ちょっと聞いてみようか？

学生A：阪神淡路大震災です。

尾木先生：おー、やっぱり違う、4年生だったよね。

学生A：いえ、3年生です。

尾木先生：3年生。すごいわ、3年生で。ね、阪神淡路大震災ですよ。あれは1995年でした。あの震災の時にですね、僕はちょうど成蹊大学で非常勤講師をしていました。そのときに僕の学生が、地震が起きた3日後か4日後ぐらいに、バイクで東京からボランティアに入って、1週間ぐらいいたのかな。それで帰ってきました。それから僕の授業で報告してもらったの。どうだったって。すごい感動的だったんです。彼は大きな企業に就職したんですけれども、大活躍してます。知ってますか？今ボランティア休暇を制度化しているのは大企業ですよ。

それで、大企業の常務の方、人事のトップの人と会った時にですね、なんでボランティア休暇を制度化しているのか聞いたんです。そうしたら、爆発的な人気商品を開発するのは、ボランティアにすぐ駆けつけようみたいな、そういうタイプの人だって言うの。つまり、ボランティアって人々との生活に密着したところで動くし、感性も豊かになるでしょ。だから、この電気掃除機こうした方がいいな、とかね。そういうふうになんか心を読んでいくことができるんですよ。

ボランティア元年って言われてるのが阪神淡路大震災で、1995年のことでしたね。ところがですね、例えばアメリカなんかで言うと、ボランティアのことが随分話題になっていたのは、1960年代の話なの。1980年代になってくると、大学が続々とですね、ボランティアを単位化したんです。単位化して、これをサービスマーケティングと言うんですけども、単位を認めていくと。例えば授業が15コマあって、そのうちに3回ぐらい大学の先生の講義が入ってきて、あとは現場でのボランティア、学びとボランティアの実際の現場との橋渡しをやっていくようなことが80年代には盛んになったんです。じゃあ、法政大学が

ボランティアセンター立ち上げたのはいつだと思います？多摩も3カ所とも同時ですけれども。2009年なんです。何年遅れてると思う？凄まじい遅れでしょ。大体オランダの教育に比べて、日本は30年遅れていると言われるのね。アメリカと比べたってすごいです。30年間遅れてきているっていうことで、皆さんはそういう意味で日本での先頭を走っているランナーよ。

それで、今年の新卒の人たちへの企業のアンケートで、ボランティア経験が大学時代にあるかどうかという調査をしてるんですよ。それによると、なんと結構やってるの。26.2%が大学時代にボランティアをやりましたと答えるんですよ。ところがじゃあ、就活の面接のときなんか、さっき発表してくれた人みたいにね、私はボランティアでこんなことを学んだ、地域の大事さを学んだとかね、相手の心を受け止めることが大事なんだとかね。上から目線の押しつけではだめなんだなっていうことを学びました、だからそれを生かした仕事をしてみたいと言ってる人っていうのはあまりいないんですよ。なんと、そのことは伏せておいたと。ボランティアをせっかくやっていたのに、伏せておいたっていうのが60%に達しています。理由はなんでかと言うと、例えばこれから銀行に勤めようとしたら、その業務と全然関係がないボランティアをやったから、意味がないと思ったとかね。あるいはそんなこと言うと、なんか卑しい、厭らしいというの？自分がそうやって人のために奉仕した人間ですよ、みたいなのをアピールしてるみたいで、厭らしく思われると嫌だからっていうので、言わなかったとか。こういう偏見に満ちた自己評価も実は多くのボランティアをやっている学生さんの中でもあるんです。

皆さんどうかっていうのはちょっと分かりませんが、これは全然違って、だから今日のこの集まりっていうのは、そういう意

味でも良いきっかけになったかと思うの。自分がボランティアでやってきたことをもう一回総括して、みんなに伝えようと思うでしょ。こんなことを学びました。3点あります。1つある、2つある、3つあると。そこにあるのは、ボランティア活動そのものが生きるっていうことではなくて、そこで掴んだ、見抜く力とか、あるいはですね、共感能力、そういうものが身に付いて、問題解決や協調性とかリーダーシップとか、そういうのが身に付いたから自信持って仕事できますとか。全然おかしくないんです。だからそういう意味で理論化を皆さんもして欲しいなと思います。振り返って、「あ、僕はこんなことを学んだな」っていうね、そしてそれは自分だけではなくか難しいから、サークルの中とか、こういう集まりを機会にして、発表し合えるとすごく深まってくる、というように思いますね。

阪神大震災のもっと前からボランティアっていうのをやっている人たちがいるんですけども、NPOで立ち上がったとか。その人たちはね、ポイントは4つだってよく言われていたの。自発性とか、無償性。やたら日本は無償性っていうのを強調するんですよ。ヨーロッパ行ったらそんなこと全然ないですよ。ちゃんと報酬もらってますよ。交通費程度は分かりませんが。それから公共性。先駆性。この4つが重要だっていうこと、よく大人たちのNPOなんかは言ってきたんですよ。でもそれにこだわる必要は全然ないなっていう風に思ってます。

それでね、大人たちのことと言うと、定年退職して、それまでは何々銀行の課長とかね、あるいは部長とか、頭取って言われたら自分のことだって、「はいよー」って返事できたわけ。あるいは学校の先生だったら、先生って言われたら「はい！」ってわかるわけでしょ。ところが今度は定年退職して、60歳過ぎてですね、地域に入っちゃったら、単なる田中さん、斎藤さんなんですよ。なにもないわけ。

そのときにやっぱり、17 時過ぎには普通の、民間の労働者もボランティアをやろうと、何々電機会社の課長の田中さんではあるけれども、17 時過ぎは地域の、例えば少年野球のコーチをしている田中さん、あるいは高齢者の生活をお手伝いしている田中さんとかね。もう一つの顔を持とうってことを言う人がいます。そういう定年退職後の地域での生き方みたいなものも、もっと考えていく必要があると思いますね。

大学生が現場に入りボランティアをする意義とは何か

それでですね、もうちょっと理論化を強めていこうと思うんですけども、大学生とボランティアとの関わりをいくつか整理してみようと思うんですけど、1 つはですね、ボランティアがいかに重要かっていうことで、今日の発表で両足を地について動き始めようとして、歩き始めようとしてる姿っていうのを最初に評価しましたけれども、これを、もっときちんと調査した研究があるんですよ。例えば学生時代にボランティアをやった人、やってない人を比べてみると、やってない人は自分で学習をするとか、読書をする時間だとか、そういう時間が少ないです、明らかに。有意差も出てくるんです。ボランティアやってる人は自分で勉強したり、自分で読書をどんどんしたり、これは皆さんの中でも気が付かれて、そういうアプローチの仕方を読書をしたり、学んだりとか、あるいは卒論のテーマにしたりとかいう人は珍しくないと思うんです。それからですね、充実感がやってる人とやってない人では全然違うと。やってない人は充実感が低いんです、比較すると。知識とか技能の力量も低い。やっぱりボランティアをやっている人の方が高い。ボランティアやってる人の方が将来に見通しを持ってる人が多いとか。こういう学生時代のボランティア

経験の意義が明らかになっています。

さらに、そのことをもうちょっと詳しく見てみたいということで、じゃあ高校時代から、あるいは中学時代から、大学入学前からですね、ボランティアをやっている人とやってない人との違いでいうと、やってた人の特徴でね、一番大きいのは、大学での授業の学び方にすごく習熟してるっていうことです。大学での学び方っていうのは、例えば皆さん大学に入ったときに、ノートテイキングから聞き方から、プレゼンの仕方とか、あるいはパソコンの操作の仕方とか、基礎ゼミでやりませんでした？入門ゼミ的なこと。やりますよね。そういうものは、すでに高校とか中学からボランティアやってたり、インターンシップやってる人はもう自動的にっていうか、そういうのせざるを得ないところに追い込まれてますから、既にできているっていうことですね。それからね、もう 1 つは先程の報告にもありましたけれども、授業外でのボランティアの学びと、授業での学びを統一させていこうと。お互いを引き寄せてこようという意識、そういう指向性が非常に強いっていうことですね。さっきの報告で 2 人ほどはっきり表現しておられましたけれども。面白かったのは例えば、スポーツ健康学部で、子どもの発達論のサークルでしたっけ？現場に入ってみたときに、やっぱり違うってことが分かるわけですよ。本当に理論どおりだったなど。さらにじゃあもっと深めていこうと。発達段階に合わせて成長させたり、付き合うっていうかしら、コミュニケーションを取るのはどう深めればいいのかっていうのは、関連の文献を読んだりとか、あるいは先生に聞いたりとか、そんなふうにしてかなきゃいけないっていうようなことを、掴んでるわけですよ。それから、人前で話すことが苦手だったけれども、ボランティアをやっているとやっぱり人前で話しますし、子どもたちの前でリーダーシップ発揮しなきゃいけないっていうので、随分慣れ

てきた、できるようになりましたっていう報告もありましたよね。そんなふうにして、授業の中での学びとボランティアが統一してくる、そういうことが非常に顕著になっているってことが1つ分かります。

それをもうちょっと理屈っぽく言うと、こういう言い方するんですよ。さっきはサービスマーケティングってことを言いましたけれども、今度はね、ラーニングブリッジング。つまり、実際にボランティアで学んでること、教室の中で講義室で授業として学んでるものを、ブリッジする、つなぐっていう役割ですね。そういう学びを高校時代からやっていたりすると、継続期間が長いでしょ。大学の3年間とか4年間っていうより、高校時代からやってる、あるいは中学時代からやってるっていうと、もう全然変わってきます。

僕が中学校の教師のときに、ボランティア活動を全員に夏休みの課題でやってもらったことがあるんです。僕のクラスにね、すごくおしゃべりな子がいたの。1時間に2,3回注意しなきゃいけないような女の子がいたんですよ。そのグループの子が三鷹のボランティアセンターへ行ってね、なんと研修で手話を習得した。中学生ってものすごい吸収力早い。中2っていうのは、知ってます？頭の回転スピードがそれまでとは100倍上がるんです、知ってる？100倍ですよ、処理能力が。脳科学でつい最近発見されたんですけれども、ティーンズ脳っていうんですよ。そしてそのボランティアがきっかけになって、彼女たちは授業も集中して取り組めるようになったんです。

ラーニングブリッジングの話に戻りますが、例えば中学生であんまり集中してない子がいたら、「あなた今脳がね、ティーンズ脳って言って凄い時期なんだよ」って。「11歳までの小学校5,6年のときの脳と、全然別の脳になってるんだから勿体ない」とか言うと子どもたちは本気になります。そういう専門性を強めていって、例えば現場で、「え、そうなん

だ先生！」って言って、目の色を変えて子どもたちがやり始めたりしたら、また深まってくるわけですよ。だから、ボランティアは極めて臨床的です。そんなふうにしてですね、学びとボランティアとが一体になって、ブリッジを架けるっていうね。

地域のボランティアの特性っていうところで、さっき話を聞きながらちょっとメモしてみたんですけども、地域っていうのはやっぱり、小中学生も赤ちゃんもお年寄りも、色々な人がいるわけですよ。色々な人がいて、年中行事があって、ハロウィンをやったりとか。色々な人を巻き込みながら、盛り上げていけると良いですよ。ボランティアってお祭りみたいな要素も多いですから。

あとはね、生活のサポート、ベロタクシーと言いましたっけ？見てて思ったけれど、あれを対面にした方が面白いんじゃないかしら？ベビーカーもそうだけれども、対面の方が良いんですよ。コミュニケーション能力豊かな子に育つんですよ。顔を見ながら喋れるから。ちょっと改造してみたら？と思いました。

それから、学習サポートも重要ですよ。熱中症のことなんかもありましたけれども、そういう医療的なところでね、ケアをしていけることとか。地域っていうのは色々な人が住んでいて、そこがいきいきと活性化されたらそこにある学校もいきいきとしてくるに決まってるわけ。だからそこを解体するのは冒頭に言ったように愚策中の愚策なわけですよ。そういうのをしっかり見てほしいと思います。ボランティアで入ると見えてくるから。皆さん現場に入って見てほしいと思うんです。

そうすると、例えばまちづくりっていうのはこうしなきゃいけないというのも学べますよね。40年前は館ヶ丘団地は凄かったんですよ。僕40年前は皆さんと同じぐらいの年だから、もう憧れでしたよ。テレビなんか映るわけ。すごいなって。抽選なんか当たらな

い。買えないし。それがさっき高齢率 40 何%とか、こういう状況になるわけでしょ。こんなことは誰もあの時予測しなかったし、建築家でそれ言った人、まちづくりのプランナーで言った人、ほとんどいないんだから。僕はズーッと栄えていくまちだと思っていたからすごくショックです。地域に入ればこうして高齢者医療の問題だって見えてきますし、それから地域とは一体何なんだろうとか、地域論としても面白いし、お互いに住み寄って力って何だろうっていうようなこととかですね、体験的に分かりますよね。

それから、先ほどの報告で僕がすごく感動したのは、「お風呂入ってますか？」っていうように聞かれていたら、学生が「それは入ってなくて臭いがしてるんじゃないかって思わ

れたりするから、良くないんじゃないですか？」っていうものすごい想像力と共感能力でしょ。こんなのだって、ボランティアに行っていなかったら、思わないわけですよ。そして学生の皆さんとね、超ベテランのプロと一緒にやってくださってるから、へえーなるほどなと思って、取り入れてくださるわけでしょ。僕たちは、学び合いながら、僕も今こうやってお喋りしてますけど、皆さんの表情とか、皆さんがさっき発表してくれた中からいっぱい盗んじやって、もうメモびっしりなんです。こういうもんだと思うの。僕たちが生きるっていうことも、学ぶっていうことも、そして実践したり、何かをお話するっていうこともね。(拍手)

シンポジウムを終えて

学生の報告では、ボランティアによる沢山の体験と貴重な学びがあったことが語られていた。以下は、このシンポジウムに参加した方々からの感想である。

(当日配布アンケートより)

- 自分もボランティア経験があるが、多摩キャン近くの団地は詳しく知らなかったもので、その近くの団地と関わりを持つボランティアもすごく重要だし、大切だと思う。学生が地域と関わっている事で、地域活動活性化につながるという事を実感した。
- 私の地元にも団地があり、高齢化が問題になっているということをよく聞きます。今回お話を聞いて、高齢化対策を多摩の法政の学生がやっていることを知り、身近で社会問題に取り組んでいることについて個人的に喚起された部分もあり、少し安心した気持ちになりました。また、高齢者が地域参加、若者と交流しているという事でしたが、この活動がその地域に合った形で他の地域にも広まると良いと思い、その方法は何かないか考えようと思いました。
- ボランティアは誰かのためにするのではなく、むしろ自分が成長するという事をどの人も感じていると思った。自分自身も感じたけれど、自分がそれまで関わったことのないところに行って、受ける側ではなく与える側に立つことでの成長は大きいと思う。
- 共通して自己の成長のために、ボランティア活動をしていることが分かった。
- 地域での学びを教育の視点から分析をして頂き、とても勉強になりました。日本もっとボランティアと講義をつないでいくような仕組みを作っていけたら・・・と感じました。